

地質65 企画展「蔵出し鹿児島の石」

地質担当 若松 斉昭

本館では、令和8年9月23日（土）から令和8年11月23日（月・祝）まで、企画展「蔵出し鹿児島の石」を開催します。この企画展では、鹿児島で見られる岩石や鉱物を中心に、常設展示されていない収蔵標本を展示します。今回の自然だよりでは、博物館で標本を収蔵する意義と、企画展のタイトルとは逆に鹿児島では産出しない岩石について紹介します。

博物館の心臓部、「収蔵庫」

博物館の大切な役割のひとつは、資料の収集と保管です。本館では、鹿児島県内を中心に自然資料の収集と保管を行っており、収集した資料は、温度と湿度を管理した収蔵庫で大切に保管しています。収蔵する標本の総数は約16万点に上りますが、常設展示されているのは約5,000点と、約3%にすぎません。



岩石標本が収蔵されている様子

収蔵されている標本は、研究者の求めに応じて、各地の標本との比較や化学分析などにも活用されています。近年では、過去に収集された化石からDNAを抽出する研究などにも活用され、科学技術の進歩に伴って過去には考えられなかった方法で研究を行うことができるようになってきました。今後さらに技術が発展した際に、過去の標本をいつでも研究に利用することができるように、現在の自然の姿を記録しておくのが博物館の重要なミッションです。

ところが最近、収蔵庫の容量がひっ迫していることや、電気代などのコストの上昇によって、収蔵した資料を適切に保管し続けることが難しくなっていることが、全国各地の博物館で問題になっています。一度失われると二度と手に入らない貴重な標本もあり、それらをいかにして守っていくかという大きな課題を解決できるよう知恵を絞っています。

鹿児島では産出しない岩石

岩石は、火成岩・堆積岩・変成岩の3つのグループに分けられ、含まれる鉱物や組織によってさらに細かく分類されています。分類の仕方によってたくさんのお名前がつけられますが、小学校から高等学校までで学習する岩石はおよそ20種類です。

前述のように、本館では県内各地から収集した岩石や鉱物を収蔵していますが、県内では産出しないために、ほとんど収蔵されていない種類の岩石もあります。その一つが結晶片岩です。

結晶片岩は、砂岩や泥岩がプレートの衝突によって高い圧力にさらされ、含まれる鉱物に変化して生じた変成岩です。変化した鉱物の中には、緑や赤の鉱物もあり、石英の白と合わせて鮮やかな色合いが特徴の



庭石に使われる結晶片岩

岩石です。加わった圧力によって表面に縞模様が見られるのが特徴で、圧力の加わり方によって縞模様が複雑に曲がっており、独特の模様を形作っています。その模様が山河に川が流れる様子を想起させるためか、庭石として珍重され、京都の寺院の庭石にも多く用いられています。しかし、主な産地は紀伊半島や四国などで、昔の人は重い結晶片岩を苦勞して運んだことが想像されます。輸送機械が発達すると、重い岩石も遠くから運べるようになり、産地から遠く離れた鹿児島のような土地でも、庭石や石塀の石材として用いられることも多くなりました。

企画展「蔵出し鹿児島の石」では、学校で学ぶ岩石の実物を間近に見ることができます。また、県内産以外の岩石や紫外線で蛍光を発する珍しい鉱物なども展示します。ぜひこの企画展で様々な岩石・鉱物を観察してみてください。